



## 老子の言葉 (読書の中より)

7月③のごあいさつ

山内公認会計士事務所

2023年7月21日(金)

- (1) 道は道であるべし。その道は通常言われているような道ではない(道経)
- (2) 科学の最後のフロンティアは何か、それは人間の脳です
- (3) 人間の脳は心とひとつのものである。死んで脳がなくなれば、すべては消滅する
- (4) 心はパソコンで言えば、ハードディスクに電流が流れたに過ぎない
- (5) 釈迦は2500年前に、自分の脳と瞑想のみによって、量子論によって導き出された結論を語っていた。見えないものを理論で研究する科学者と同じ仕事をしていた
- (6) 故に、常に無欲であれ、真実が見える。欲あれば自己の求めることに偏す
- (7) 天は長く地は久し。進んで敢えて、前とならず(道教)
- (8) 上善は水の如し。水は善く万物を利して争わず(道教、孫子)
- (9) 五色は人の目を盲ならしむ。五味は人の口を爽わしむ(道経)
- (10) 鳥が飛び、魚が泳ぎ、獣が走ることは、私も知っている。走るものは網で捕え、泳ぐものは糸で釣り、飛ぶものは矢で射ることもできる。しかし、龍となると、風雲に乗って天に昇るというがまるで手に負えない。今日、老子に逢ったが、龍さながらで、全く正体がつかめなかった(史記老子列伝)
- (11) 賢人を重用とせよ、そうすれば民は争わなくなる。多言はしばしば窮す、空を守るにしかず(道経)
- (12) 命もいらす、名もいらす、官位も金もいらぬ人は(からっぽ)、仕末に困るもの也。此の仕末に困る人ならでは、艱難を共にして国家の大業は成し得られぬ(西郷南洲遺訓)
- (13) 学を為すには日に益し、道を為すには日に損す
- (14) 老子は現世離脱型の志向、孔子は現世密着型の志向
- (15) 老子の生きた時代は中国戦国末期、歴史の大変動期であった
- (16) 武帝の皇太后は儒家を認めない道家の信者だった
- (17) その実をとって花をとらない。だから彼を捨てて、此をとるのである
- (18) 老子のキャッチフレーズは、「道」、「徳」、「一」、「大」である
- (19) 上徳は自らを不徳とする。それゆえに有徳である
- (20) 徳がなくなると仁が要り、仁がなくなると義理が要り、義理がなくなると「礼」が要る。「礼」を捨てれば「文化」、「自由」が生まれる
- (21) 故に道を失いて面して後に徳あり、徳を失いて面して後に仁あり、仁を失いて面して後に義あり、義を失いて後に礼あり

- (22) 本当の力は空白である。不満を持たない、欲を出さない
- (23) 言ったもん勝ちは老子の精神ではない
- (24) 他人に勝つより自分に勝つ
- (25) 玄妙なものこそは神秘的なもののすべての間である
- (26) 釈迦は、靈魂や死後の世界については語っていません
- (27) オカルトはビジネス、霊やあの世があると振る舞むのもビジネス
- (28) 時代が悪くなると法律が多くなる
- (29) 人生万事塞翁が馬
- (30) ござかしい知恵・作り出した考え・つまらぬ疑を持つな
- (31) 道教は「道」の教えであり、宇宙の根源のことであり、バラモン教で言うブラフマン(神)のことである
- (32) 道行の修業は「タオ」と一体となるための修業である
- (33) 道教は、民衆の間で信仰されていた中国の迷信の寄せ集めである
- (34) 善と悪と相去ること何若ぞ
- (35) 老子は儒家の言う礼の形式や偽善性を批判している
- (36) 老子のいう道とはそこから天地万物が生成してくる宇宙の根源である
- (37) 物は壮んなれば則ち衰ゆ
- (38) 吾が言は甚だ知り易く、甚だ行い難きも、天下能く知る者なく、能く行うものなし
- (39) 火を起こすフィゴの中で、一番大切なものはガランドウの部分だ
- (40) 孔子が居たからこそ老子が居たのではないか、時代は孔子が先
- (41) 五色は人の目をして盲せしむ、五味は人の口をして爽わしむ
- (42) 谷は低い水も流れこむ、谷神は死せずこれを玄牝という
- (43) 水は方円の器にしたがう、水はよく万物を利してしかも争わず
- (44) 自然はつねに反復、栄えるものは衰え、衰えたものは栄える
- (45) 君子は名に殉ず、小人は財に殉ず
- (46) 心に私なき時は疑ふことなし (上杉謙信)
- (47) 仏神は尊し、仏神をたのまず (宮本武蔵)
- (48) 我、人に勝つ道はしらず、我に勝つ道を知りたり (柳生宗矩)

参考：(司馬遷史記 徳間書店)、  
(老子の読み方 渡部昇一、谷沢永一著 PHP 研究所)、  
(老荘思想がよくわかる本 金谷治 アマゾン)、  
(トルストイにより「老子道徳経」は、壮大な詩に生まれ変わった。吉橋泰男 アマゾン)、  
(男の老子 童門冬二 アマゾン)、  
(孔子・老子・釈迦「三聖会談」 諸橋轍次 講談社)